

道路11 神戸淡路鳴門自動車道(徳島県)

No.	資料名	ストック効果に関する記述
徳島6	徳島県教育委員会編「徳島県の近代化遺産」(徳島県教育委員会、2006年)、28頁	<p>神戸・鳴門ルート (中略)大鳴門橋は、昭和60年6月8日に全長1,629mが開通し、虎之助の夢は、建議から70年余り後に現実のものとなった。</p> <p>その後、昭和63年5月には本四公団が明石海峡大橋の現地工事に着手し、平成10年4月5日には、県民待望の明石海峡大橋が開通し、本四連絡道の神戸・鳴門ルート(神戸淡路鳴門自動車道)が全線開通となった。徳島県は、阪神地域と淡路島を通じて直接結ばれ、徳島市から神戸市までは自動車でも2時間足らずとなった。(中略)</p> <p>このように徳島県は、神戸・鳴門ルートの開通によって明石架橋新時代を迎えたが、それは関西圏との交流が活発化し一体性が強まるとともに、関西地域との競争の時代を迎えたことも意味し、今後も本県の経済・社会・文化状況は大きく変貌を遂げていくものと予想されるのである。</p>
徳島55	鳴門市史編纂委員会編「鳴門市史 現代編1」(鳴門市、1999年)、347-348頁	<p>大鳴門橋 (中略)</p> <p>大鳴門橋は、開通して一〇年余りが経過し、鳴門市に四国の玄関都市として、産業・経済・文化・教育・福祉などの諸分野に効果をもたらしている。平成七年一月の阪神・淡路大震災では、徳島県から救援物資を送るなど、文字どおり「救援橋」の役割をはたし、橋の重要性が認識された。</p>
徳島77	脇町史編集委員会編「脇町史 下巻」(脇町、2005年)、1012頁	<p>神戸淡路鳴門自動車道</p> <p>昭和六十年(一九八五)大鳴門橋、平成十年、明石海峡大橋が開通したことで、高速道で本州と直結、高速バスが運行され、京、阪、神への日帰り旅行ができるようになり、地方と都市の差が少なくなった。生鮮食料品の輸送、販売が有利になったが、県外製品の流入も容易となり、産地間競争は激しくなった。</p>
四国22	土木学会中国四国支部編「土木へのいざない」(土木学会中国四国支部、1991年)、95頁	<p>神戸・鳴門ルートの架橋効果</p> <p>神戸・鳴門ルートは、津名一宮インターチェンジから鳴門インターチェンジまで、約45km区間が大鳴門橋関連区間として部分供用されています。</p> <p>大鳴門橋の開通後、交通量は順調に伸びて、平成2年度の日平均交通量は約8,300台となっています。</p> <p>架橋により燃料費の節約、走行時間の短縮、地域開発の促進、医療施設など社会福祉の拡大、物価の低減のほか電気・電話施設の収容による生活基盤の確保などの直接・間接的な効果がでています。</p> <p>今後、明石海峡大橋が完成し、この路線が神戸まで伸び、近畿・中国・四国地区の高規格幹線道路網と連絡することにより、架橋効果は益々増大するものと期待されています。</p>

道路11 神戸淡路鳴門自動車道(徳島県)

No.	資料名	ストック効果に関する記述
四国107	本州四国連絡橋公団編「橋・人・未来～本州四国連絡橋の整備効果集～」(本州四国連絡橋公団、2000年)、5-7頁、9-10頁、12頁、38頁、70頁	<p>本州四国連絡橋の整備効果(神戸淡路鳴門自動車道を中心に)</p> <p>(1)神戸・鳴門ルートの移動時間の短縮 神戸市役所～徳島市役所間の神戸・鳴門ルート(神戸淡路鳴門自動車道)の所要時間は、一般道路・フェリー利用の270分から100分へと170分短縮された。</p> <p>(2)随時性の確保 フェリー時代は運行ダイヤによる制約を受けていたが、本四道路は24時間いつでも利用可能であり、交通の随時性が格段に向上した。</p> <p>(3)交流圏の拡大 本州四国連絡道路と関連する高速道路網の整備により、架橋関連地域の3時間圏内の人口、面積が飛躍的に拡大し、このことにより、経済、文化、生活分野での交流圏が拡大している。</p> <p>(4)交流人口の増加 本四間の交流人口は年間5,000万人。昭和59年度と平成10年度を比較すると、1.7倍の増加と、全国の1.4倍を上回る。輸送機関別にシェアの推移をみると、フェリー・旅客船の激減の一方で道路の急伸、鉄道の漸減、航空機の堅調という傾向がみとれる。このような本四間の輸送人員の中で、本四架橋(道路+鉄道)はその3分の2を担っており、交流人口の増加に大きな役割を果たしている。 本州と四国・淡路を結ぶ高速バスの輸送人員は急増しており、例えば明石海峡大橋関連の路線バスは平成12年3月時点で601便運行され、開通当初より89便の増便となっている。</p> <p>(5)物流の増加 自動車による阪神・山陽地域から四国地域への貨物輸送量は、架橋前の昭和61・62年度平均の約8,480千トンから架橋後の平成8・9年度平均で9,752千と1.15倍に増加。また、四国地域から全国への輸送量も同時期に12,110千トンから14,639千トンと1.21倍に増加。同時期に全国の自地域内を除く自動車による貨物輸送量が1.13倍となっていることと比較して、本四間では架橋が貨物流動の増加に寄与している。</p> <p>(6)香川の水産物の市場拡大 神戸淡路鳴門自動車道の全通により、香川の水産物の市場が拡大している。香川県漁連では、漁港に水揚げされた魚の大阪のデパートでの直販を開始しており、販路が拡大した。なお、神戸淡路鳴門自動車道開通当初は週1回行っていたが、現在では週2回に回数を増やしている。</p> <p>(7)地域開発プロジェクトの進行 架橋を契機に各地で地域開発プロジェクトが進行している。また、先端産業に対応するための研究開発拠点の整備も進められており、架橋関連地域の投資ポテンシャルを向上させている。</p>

道路11 神戸淡路鳴門自動車道(徳島県)

No.	資料名	ストック効果に関する記述
四国110	本州四国連絡高速道路編「2016ディスクロージャー誌」(本州四国連絡高速道路、2016年)、112-113頁、118頁、120頁、122頁、124-125頁	<p>本州四国連絡高速道路の整備効果(神戸淡路鳴門自動車道を中心に)</p> <p>(1)3時間圏域の拡大 本四高速道路の整備などにより、瀬戸内地域の主要都市からの3時間圏域は大きく広がりました。昭和60(1985)年の大鳴門橋開通前と比較すると、平成28(2016)年では3時間圏域の面積は約7倍、人口は約8倍に拡大しました。</p> <p>(2)交流人口の増加 本四間の自動車交通量は、本四高速道路の開通により飛躍的に増大しました。大鳴門橋開通前の昭和59年度と比較すると、平成27年度では、本四間の自動車交通量は約3.3倍にまで増加しています。なお、同期における全国の自動車交通量は、昭和60年度から平成22年度までで約1.4倍でした。 本四間の交流人口は、昭和59年度と平成27年度を比較すると、約2倍に増加し、年間5,900万人を超える人数となっています。このうち、本四架橋(道路+鉄道)は、本四間の輸送人員の約84%を担っています。</p> <p>(3)物流の活性化 四国と全国間の貨物輸送量は、昭和59年度から平成26年度の間に約2.3倍に増加しました。 四国と阪神、山陽地域との流動量は着実に増加しています。特に本四3ルート開通後は広域化が進み、中部、関東・甲信地域との流動量も増加しています。</p> <p>(4)地域間交流の活性化 本四間を結ぶ高速バスは、平成10年の明石海峡大橋開通以降、京阪神と四国を結ぶ路線を中心に便数及び輸送人員とも大幅に増加しています。</p> <p>(5)設備投資額の増加 四国地域の設備投資は、各ルートの開通前後に最も大きく伸び、現在においても概ね全国を上回る傾向が続いています。</p> <p>(6)阿波尾鶏の販路拡大 神戸淡路鳴門自動車道等の開通以降、高速道路を使った冷凍・冷蔵輸送により中国地方、近畿地方、関東地方などに販路を拡大し、平成14(2002)年には地鶏の産地別シェアで全国一になり、平成26(2014)年現在で、27.6%を占めています。</p> <p>(7)LED産業の集積への貢献 徳島県のLED関連企業では、主に神戸淡路鳴門自動車道を経由し、原材料、部品、製品を調達・納品しており、特に関西以東に向けてのリードタイムの短縮と安定的な物流の実現に本四高速道路が貢献しています。</p>
四国110	本州四国連絡高速道路編「2016ディスクロージャー誌」(本州四国連絡高速道路、2016年)、129頁、131頁	<p>本州四国連絡高速道路の整備効果(神戸淡路鳴門自動車道を中心に)</p> <p>(8)観光客の増加 明石海峡大橋開通時には徳島県において、県外観光客が大幅に増加しました。</p> <p>(9)移動時間の短縮 神戸市役所～徳島市役所間の神戸・鳴門ルート(神戸淡路鳴門自動車道)の所要時間は、一般道路・フェリー利用の270分から100分へと170分短縮されました。</p>